

## 幕末明治の洋学者・渡部温（一郎）覚え書(1)

片 桐 芳 雄

Yoshio KATAGIRI

(教育学教室)

### 1 は じ め に

渡部温，といっても知らぬ人が多いかもしれない。しかし，明治維新後はじめて，本格的に，イソップ物語を英語本から翻訳紹介した人物だといえば，思いあたる人もいるであろう。渡部温の翻訳した『通俗伊蘇普物語』は，明治啓蒙期の修身教科書のひとつとして，『日本教科書大系』近代編第10巻にも収録されている。この書は，日本のイソップ物語の導入史はもとより，英学史のうえでも逸することのできないものとして必ず登場するのである。<sup>1)</sup>

しかし，渡部温の業績は，これにとどまるものではない。日本人の手によって発行された最初の近代的新聞とも言うべき『中外新聞』発行の有力メンバーとして，また，アダム・スミスの国富論のわが国最初の紹介者として，新聞史や経済学史上においてもその業績はすでに先学の紹介するところである。<sup>2)</sup>

この他，明治以後はじめて，師範学校が編纂した地理教科書，『地理初歩』の原書というべきコーネルの *Primary Geography* の翻刻を，すでに幕末慶応年間に『地学初歩』と題しておこなっていることも見逃すことのできない業績である。

もとより，このように，一身にして数々の“わが国最初”の業績をもち得るのは，西洋文化にはじめて全面的に接触した幕末から明治の時代において蘭学や英学に通じた人々，すなわち洋学者たちにのみゆるされた幸運と言うべきものかもしれない。私は，ふとした機会にこの人物を知って以来，渡部温（一郎）なる名前を，思いがけないところに見出して，しばしば驚いたものであった。

しかし，渡部温は，当時一般の国民が学ぶ機会をほとんど持ち得なかった英学をたまたま理解することができた故に，このような数々の歴史の場面で名を残すことができたにすぎないとのみすましてしまうには，いま少し惜しい人物である。

彼は，明治も十年代の後半になって，今度は有名な「康熙字典」の校訂者として，すなわち漢学に通暁した人物として登場するのである。

漢学にくらい私は，この仕事かどの程度価値あるものかは十分にはわからないが，しかしこの仕事は漢学史のうえでも逸することのできないものとされる。<sup>3)</sup> 彼の校訂した『標註訂正康熙字典』は，その刊行からおよそ100年を経過したつい数年前（1977年）に講談社からそのまま復刻出版されていることから，その重要さをうかがうことができるのである。

洋学のうでで、功なったかと思われるこの人物は、何ゆえにそれから10年経るか経ないかの間に、あのぼう大な康熙字典の標註や訂正を行なうことになったのか。私のこの人物に対する関心は一層深くなってくるのである。

本稿は、私がこれまでその名前に出会うたびに書きとめておいたメモと、今度あらためて調べた資料をもとに、渡部温の業績を可能なかぎりあきらかにしようとしたものである。上述のように渡部温は、幕末維新史上いろいろな場面に登場し、その場面に応じた紹介がなされているのであるが、逆に、渡部温自身に即して、これら多方面にわたる業績を通観したものはあまり見当たらないのであるから、本稿にも多少の意義が存することになるであろう。<sup>4)</sup>

なお、渡部温はほゞ明治5年ごろをさかいに、一郎から温(おん)と改名する。本稿は紙数の関係で、ほゞこの時期、すなわち『通俗伊蘇普物語』の訳業に彼がとりかかるところまでしかとりあげることができないので、本稿では以下一貫して、改名前の「一郎」の名を使用する。

「温」の名は、すでに諸書によって紹介されているように、「温故知新」からとったものである。「温故知新」は、一郎が改名前からたいへん好んだ、いわば座右の銘というべきものであった。しかし、維新前には、同じくこの句から「知新」と号したことはあったが、「温」と名のったことはほとんどない。何ゆえに維新後になってもっぱら「温」を名のるようになったか、そこには渡部一郎の特別の想いがあったのではなかったかと、私は想像するのであるが、これらの問題については、次稿であらためて論ずることにしよう。

このほか、「悟堂」と号することもあり、また書屋号として「無盡蔵」を用いた。「温」は諸書によって「タズヌ」「タズネ」などと読まれているが、「オン」と読むのが一般である。

## 2 渡部一郎の洋学者への道

渡部一郎は、1837(天保8)年6月20日に生まれた。幼名は銈太郎、元服して一郎と名のった。

父は渡部重三郎、白鷗と号し、幕吏を勤め、長崎奉行組同心、江戸詰御台所番、下田奉行支配手附出役、下田奉行支配調役並、神奈川表支配調役並、富士見御宝蔵番、海軍奉行普組等の諸役を転々とし、慶応3年61才で没した。

一郎はこのように幼時より父に伴われて、長崎、下田、神奈川(横浜)など、日本と西洋との接点となった土地ですごした。このことが彼の西洋文化、あるいは洋学に対する関心を醸成することになったであろう。<sup>5)</sup> 特に異国情緒の濃い長崎での生活は、いまだ少年だった一郎に、西洋文化への強い興味をいだかせると同時に、洋学を学ぶことの抵抗感を少なくしたにちがいない。

父が下田奉行に勤めるようになったのは、1854年、嘉永7年7月のことである。この前年ペリーが浦賀に來航し、嘉永7年3月には日米和親条約が締結され、下田が開港された。そしてこの年11月、元号は安政に改まる。まさに開港に繁忙する下田奉行に、父は勤めることになったのである。

一郎もまた、翌々56年、安政3年2月、満18才のとき、下田表御役所書物助に採用された。同年8月、ハリスがアメリカ初代の駐日総領事として下田に着任した。父とともに下

田奉行に勤めるようになった青年一郎は、数々の外国文書の翻訳の浄書等々に精力的に働いたことであろう。

ついで父は、58（安政5）年12月、神奈川表支配調役並に役替えとなった。そして一郎もまたこのあとを追って、翌59年11月神奈川表御役所書物御用見習となった。この年の6月、すでに幕府は、ロシア、フランス、イギリス、オランダ、アメリカの5ヶ国に対して、神奈川、長崎、函館の3港において、自由貿易を許可する旨の布告をおこなっていた。日米の窓口となった下田港は閉鎖され、長崎、函館とならんで神奈川（横浜）が対外貿易に中心的な役割をはたすことになったのである。

まさに渡部父子は、日本の開国の最前線の実務に、最もまぢかに立合っただけであった。そして一郎は、このようななかで、最初は蘭学に、やがては英学を身につけ、これらを解しうる数少ない幕臣のひとりとして、重んぜられることになるのである。

一郎は、1862（文久2）年正月、蕃書調所英学句読教授出役に抜擢された。満24才のときである。

言うまでもなく蕃書調所は、徳川幕府の洋学研究教育機関として、勝海舟らの手によって安政3年に創設された。当初、蘭学校、洋学館などの名称が考えられたが、洋学のための学校設立に反対する昌平黉の妨害によって、このように称されることになったという。のち、文久2年に洋書調所、文久3年に開成所と改称、慶応4（明治元）年まで11年余り存続した。これが明治維新後、大学南校となり（M 2.12）、さらに東京開成学校を経て、1877（明治10）年4月東京大学となったことは周知のところであろう。<sup>6)</sup>

蕃書調所の設置目的は、外交・軍事上必要な洋書の翻訳と、そのための翻訳官や通訳官の養成にあった。そして蕃書調所に教官として諸藩から登用された人々は、みな当代一流の洋学者だったと言ってよい。最も有名な人々にかぎっても、次のようなそうそうたる人々の名前を挙げることができる（登用年月順）。

箕作阮甫（津山藩）、松木弘安（寺島宗則・薩摩藩）、村田蔵六（大村益次郎・長州藩）、西周助（周・佐倉藩）、津田真一郎（真道・津山藩）、箕作秋坪（津山藩）、大島惣左衛門（高任・南部藩）、杉純造（享二・福山藩）、加藤弘蔵（弘之・出石藩）、箕作貞一郎（麟祥・津山藩）、伊藤圭介（名古屋出身）、宇都宮鉦之進（三郎・紀州藩）、外山捨八（正一・直参）、神田孝平、鈴木唯一、柳河春三（紀州藩）、小幡篤次郎（中津藩）

蕃書調所は最初蘭学の研究教育機関として出発した。しかし、やがて英学、仏学、独逸学の部門が分化し、同時に、化学、物産学、数学、画学等の科学技術の諸学科も新設された。

とりわけ英学に対する需要は急速に増加し、文久2年には総数およそ100人の生徒のうち、60～70人は英学の生徒であった、といわれる。<sup>7)</sup> 蘭学から出発した日本の洋学は、やがて英学が中心になってゆくのであるが、この間のエピソードとして、はじめて横浜にもむいた福沢諭吉の驚愕を思い出せば十分であろう。

渡部一郎が、英学句読教授出役に任ぜられたのも、英学生の急増に対処すべく、英学の教授陣を充実させる必要があったからである。

当時の語学部門の教官組織は、上から教授職出役、教授職並出役、教授手伝出役、教授手伝並出役、そして句読教授となっていた。このように句読教授は教官組織の最下位におかれ、正式の教授方というよりも、教官の補佐を勤め自から洋学修業を行ないながら、初歩的な教育にあたったと考えられる。そして主として直参のなかから選ばれることが多かつ

たという。<sup>8)</sup>

一郎はまさに、こうした条件にぴったりの人物であったのである。

蕃書調所では一般に上級の教授方には諸藩の藩士、つまり幕府にとっては陪臣を、句読教授などには直参を採用するケースが多かったという。もとより徳川幕府にとっても、直参によって全教官を構成したいにはちがいがなかったが、洋学に通ずる直参の数にはかぎりがあり、しかもそのような数少ない洋学精通者は、たとえば勝海舟が長崎海軍伝習所に赴いたように、外交や軍事の、より枢要な部署に起用せざるを得なかったのである。そして洋学にある程度素養のある若手の直参を、さらにその語学に磨きをかけるべく句読教授などに採用した、というわけであった。したがって句読教授となった直参は、やがてある程度の洋学の知識が身につくと、当時幕府にとって急を要した陸海軍の拡充や軍事関連技術の伝習等の仕事に配置されて行く者も多かった。

そのようななかで、渡部一郎は句読教授を出発点として、一貫して蕃書調所＝開成所にあり、慶応4年の幕府倒壊の時点では、英学教授職並にまで昇進し、同時に開成所調役を兼ねるまでになったのであった。このように教官組織の最下級の役職たる句読教授から、直参も御目見以上の役職である教授職並まで昇進した例は一郎以外になかったのではなかろうか。

そもそも先述のように、直参が中心になって蕃書調所＝開成所の教官を構成することが幕府の一方の願いであってみれば、一郎はこのような幕府の期待にもっともよくこたえたというべきである。直参の若手教官のよき先輩格として、同時にもともと手薄な英学科の教官として、一郎は開成所内で指導的役割をはたすようになってゆくのである。<sup>9)</sup>

### 3 蕃書調所＝開成所における活動——英書の翻訳と翻刻

1862(文久2)年より68(慶応4)年にいたる6年余の渡部一郎の蕃書調所＝開成所時代の活動について、二つのことを記しておく必要がある。第1は英書の翻訳や翻刻等、英学教官としての本来の仕事というべきものであり、第2に、開成所に集う洋学者によって組織された会訳社というグループによる新聞発行の仕事である。本節では、まず前者について述べよう。

この時代に、渡部一郎が翻訳・翻刻した書物として今日あきらかなのは、次の7書目である。以下、刊行順に紹介していこう。

1. コーネル著 地学初歩・翻刻 全2冊、慶応2年、江戸刊。東書文庫および愛知教育大学図書館所蔵。

本書はアメリカの地理学者 S.S. Cornell の Primary Geography を翻刻したもの。初版は慶応2年だが、その後いくども版をかさねたようである。東書文庫には2種の版があるが、ひとつは全2冊、もうひとつは全1冊である。おそらく前者が初版であったと推定される。後述のように、沼津兵学校時代の明治4年に刊行されたのは全1冊であるから、後者がこれにあたるのではなかろうか。

愛知教育大学図書館には、全1冊のものが4冊、所蔵されている。これらすべてに、後年押されたと思われる「愛知県第一師範学校図書之印」という蔵書印があるが、そのうちの1冊には、「愛知県中学校」の校印がうすく読みとれる。愛知県中学校は明治10年の創

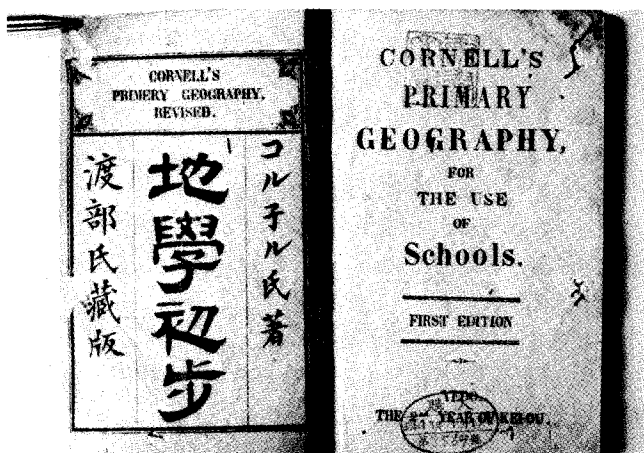


図-1 『地学初歩』見開き（東書文庫所蔵）

設だが、これはその前身官立愛知外国語学校（M7創設）の蔵書をひきついたのではあるまいか。いずれにしろこの書は、明治初期の地理学入門書として相当普及したものと思われる。

コーネルの地理学教科書は、倉沢剛によれば、<sup>10)</sup> この **Primary Geography** はじめ、**Intermediate Geography** と **High School Geography** の3冊に体系づけられ、この他、入門書として **First Step in Geography** があったという。そして、明治6年11月に師範学校が編集し文部省がはじめて刊行した『地理初歩』なる教科書は、**First Step in Geography** か、またはこの渡部一郎が翻刻した **Primary Geography** と **High School Geography** の二書を翻訳・編集したのではないかと推定される。

いずれにしろコーネルの地理教科書は、明治初期のわが国の地理教育に大きな影響を与えている。東書文庫に所蔵されているものだけでも、帆足義兼『地形論』（明治10年・全4冊）、関藤成緒纂訳『学校用地文学』（明治16年・全2冊）、西村恒方訳『萬国地理訓蒙』（明治5年・全1冊）などは、いずれもコーネルの地理書の翻訳である。

とりわけ一郎が翻刻した『地学初歩』は、英語の入門用教科書としても相当普及したようである。先述のように版がいくたびか重ねられたと推定されること、愛知外国語学校（のち愛知英語学校）の教科書としても使用されたと考えられること、さらには、明治10年に尾形良造訳『地学初歩直訳』なる本が出版されていることなどは、『地学初歩』の普及度を示すものと考えてよいのではなかろうか。この尾形訳『地学初歩直訳』は、『地学初歩』の全くの遂語対照訳で、本書の学習参考書というべき本なのである。

なお福沢諭吉の有名な『世界国尽』は、「英吉利、亜米利加にて開版したる地理書、歴史類を取集め、その内より肝要の處だけ通俗に訳したるもの」<sup>11)</sup> であるが、このなかに「地学初歩」(**Primary Geography**) もまた含まれていたことは明らかである。東西南北の方角を教えるために、北に向って両手をひろげた少年の絵を示す説明の方法は、「地学初歩」のものと同じなのである。<sup>12)</sup>

2. マクドウガル著 陸軍士官必携・翻訳、全10冊 慶応3年 江戸刊。静岡県立中央図書館（英文庫）所蔵。

本書は遺憾ながら筆者未見である。故戸塚武比古によれば、<sup>13)</sup> この原書は英国サンホルスト兵学校教官マクドウガル (Mcdougal) 陸軍中佐の著書 *Theory of War* である。翻訳して幕府当局に献納され、翌慶応4年7月に第10冊で完結した、という。そして明治以後にも軍人の間で広く読まれ、明治20年には丸善から4・6判洋装本として、新たに出版された、とのことである。

なお静岡県立中央図書館の『江戸幕府旧蔵図書目録』によれば、5巻として、5冊が1帙におさめられている。また大槻如電原著『日本洋学編年史』<sup>14)</sup> によれば、慶応3年の頃に3冊として「柳川春三閔」とあり、松崎実の「解題」も全3冊とする。また、これによれば「開成学館助教授渡部一郎温訳」とあるとのことである。

さらに、明治3年2月大学編刊の「新刻書目一覧」、および明治4年4月大史局編刊の同名書<sup>15)</sup> には、いずれも10冊と記されている。また前述の明治4年版『地学初歩』の巻末にある「無盡蔵々板目録」も全10冊とする。

以上要するに、戸塚のいうように慶応3年にまず3冊（または5冊）刊行され、明治になって全10冊が刊行されたのであろう。

なお、前掲「無盡蔵々板目録」に「英ゼ、テオリ、オフ、オワ」とあるのが本書の原書であろうが、この原書が計画どおり翻刻されたかどうかは不明である。

3. ファン・デル・ペール著 英吉利会話篇・翻刻 全1冊 慶応3年、江戸刊。東書文庫所蔵。

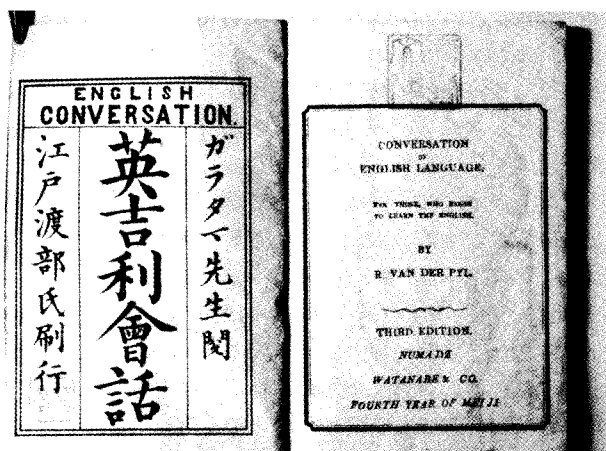


図-2 『英吉利会話篇』見開き（東書文庫所蔵）

見開きには単に「英吉利会話」とあり、「ガラタマ先生閔、江戸、渡部氏刷行」とある。原書は *Conversation of English Language*。大槻如電によればオランダ人ファン・デル・ペール (Van Der Pyl) の『英蘭会話文典』の「英文会話のみを採りて翻刻したるもの」<sup>16)</sup> とのことである。For Those, Who Begin to Learn the English とあるところから初学者用テキストであろう。内容は 1. Good day, 2. Good evening, 3. Good night, 4. Good morning, 5. Give me, 6. Lend me. といった日常会話が初歩から順をおってとりあげられている。なお、後掲の『英蘭会話訳語』は本書を翻訳したものである。

校閲をしたのは慶応3年4月に開成所唯一の御雇外国人教師となったオランダ人ハラタ

マ (Garatama) である。ハラタマは主として化学の教授にあたり、わが国の本格的な化学の導入はこの人物によって始められたとされている。<sup>17)</sup>

なお東書文庫所蔵本は明治4年に沼津で刊行された第3版である。この本も英会話テキストとして広く利用されたのである。

4. 英佛単語篇注解・翻訳 全1冊 慶応3年 江戸刊。

本書は未見であるので、荒木伊兵衛『日本英語学書志』の記すところを、まずそのまま引用しておく。

「本書は開成所本単語篇を和訳せるものにて訳述者は明記してゐない。巻末に慶応三丁卯歳五月開成所校本とあるがその下に無盡蔵の朱印があるから渡部一郎の版であらう。和紙・和装・木版刷・横本（横 15.6 cm, 縦 11.2 cm）」<sup>18)</sup>

ここに言う開成所本単語篇とは、文久2年に洋書調所から、また慶応2年に開成所から再版された『佛蘭西単語篇』、および慶応2年開成所刊の『英吉利単語篇』をさす。この両書は英語とフランス語のちがいはあるが、語数・内容など全く同一である。「英吉利単語篇が原書に拠らずして洋書調所板の仏蘭西単語篇を英訳して作ったものかどうかは甚だ疑問」とされる。<sup>19)</sup>

要するに本書は、英語版とフランス語版の単語篇を合せて日本語訳をつけたものである。

なお、荒木は訳述者不明としているが、大史局編刊「新刻書目一覧」に、「英佛単語篇 柳河春三・渡部<sup>(ママ)</sup>一郎合訳 一冊」とあるのが、おそらく本書の再版であろうから、柳河春三と渡部一郎の共訳であることはあきらかであろう。

5. 西洋蒙求・翻刻 全1冊 慶応3年 江戸刊。九州大学筑紫文庫所蔵。

本書も未見であるが、荒木伊兵衛前掲書<sup>20)</sup>と三橋猛雄編『明治前期思想史文献』<sup>21)</sup>にやゝ詳しい紹介がある。

松崎「解題」には、「初版は明治4年沼津刊、再版東京刊」となっているが、三橋の示すように、すでに慶応3年に江戸で刊行されていたものと思われる。

荒木と三橋の記すところを総合すると、表紙に A Book of Lessons Anec-Dote とあり、その下に西洋蒙求としてある。タイトルは、A Book of Lessons for the Use of Schools. Published by Permissions of the School Kaiseido Yed. Printed by Watanabey-Itiro, Wosigome-Karocozaka, Kai ou 3rd.

内容は The History of Columbus, and his Discovery of America. The History of the Russian Emperor Peter the Great. History of Isaac Newton. History of James Ferguson, The Astronomer. Washington's regard for his Mother. The History of French Revolution, and Napoleon Buonaparte. Alfred and his Mother.

このように本書は、コロンブスのアメリカ発見、ロシヤのピュートル大帝、ニュートン、ワシントン、フランス革命とナポレオン等、西洋の近代史から興味深そうな物語をえらんで収録したものであるが、原書は不明である。英語読本のテキストとして使用されたであろう。

荒木の紹介するものは、見返しに「明治三年庚午改官許」(傍点片桐)、タイトルに Second Edition Numadz, Itiro W.N. & Co. Meiji 4th とあるから、これは再版であろう。

6. 英蘭会話訳語 全1冊 明治元年、江戸刊。東書文庫所蔵。



図-3 『英蘭會話訳語』表紙（東書文庫所蔵）

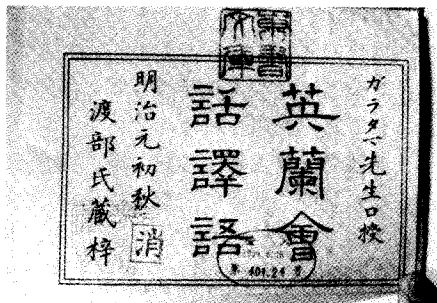


図-4 同・見返し

表紙には JAPANESE CONVERSATION. その下に英蘭會話訳語を題されて、横長本である。見返しに「ガラタマ先生口授、明治元初秋 渡部氏蔵梓」とある。つづいて渡部一郎自ら次のように序文を記している。

「余曾て蘭人ファンデルペールの著せる英吉利會話篇を刷行す、然るに学兄川本内田の二子之を開成学館の教師ガラタマ先生に従って読み、直に我邦俗間の通訳に訳出し以て之を余に贈れり、余近日纔に閑あるによりて之を看るに惜哉其稿未だ全からず儘錯乱の処あり、然るに二子既に遠く別れて其不足を求る事易からず、因て今之を自から補削校定して曾て倫頓に留学せし友人外山子に訂し以て貿易市場彼我日用に備ふと云」

ここに登場する「学兄川本内田」は、蕃書調所創設以来教授職をつとめた川本幸民の悻清次郎と内田弥太郎である。<sup>22)</sup> 兩人とも直参で当時おそらく一等教授であった。<sup>23)</sup> 一等教授は開成所末期の学政改革のさい新設された役職で、渡部一郎の教授職並のひとつ下の職である。これら兩人の訳業について、「惜哉其稿未だ全からず儘錯乱の処あり、……因て今之を自から補削校定し」といった文面に、英学教官のリーダー格であったという一郎の自負がうかがわれる。なお「外山子」は、のち東京帝国大学総長、文部大臣を歴任した外山捨八（正一）である。

本書の内容は、序にあるとおり、前掲『英吉利會話篇』を和訳したものである。1.コンニチハ、2.コンバンハ、3.オヤスミナサイ、4.オハヤウ、5.クダサイ、6.オカシナサイ、といった具合であるが、訳語を日常のことばになるべく近づけるよう努力しているところが、のちの『通俗伊蘇普物語』の翻訳と合せ考えて興味深いところである。そこには今日では想像もできぬような苦労があったのである。

序につづく附言で、一郎はわざわざ次のようにことわっている。

「會話は因より其国日用の通語なり、西洋各国に於ては必らず文法の定あるが故さして詞に雅俗の区別なし、然るに我国に於ては古より文法を論する書なく且漢字の用盛なるより遂に雅俗の語雲壤懸隔す、加之ならず国中に各地の方言訛音ありて邦人すら訳を用ひされば互に解せざることのあるに至れり、実に憂ふべき事なり、余今此書を考定するに方りて、英の言意語気を其儘に存せんとすれば詞頗る卑陋に涉り大人君子の嘲を免れず、又之をして正且雅ならしむる時は俚俗の耳に入難し、之を如何ともすへき様なし、故に余は寧大人君子の誹を甘んじて都て江戸の方言を以て記し、會話の會話たるの大主意を失はず」

こうして一郎は、たとえばミナ（皆）をミンナ、カヒテ（買）をカッチ、また、……デゴザリマス……デゴザイマスなど、江戸方言を用い、なるべくこなれた訳語をあてるべ



く努力した。これは『通俗伊蘇普物語』にも踏襲され、これらの書が巷間広く迎えらるるのに役立ったであろう。

7. モルレイ氏英吉利小文典 翻刻 上下2冊, 明治元年(推定)刊。

本書もまた未見なので, 荒木伊兵衛<sup>24)</sup>によって紹介しよう。

本書の原本はアメリカ生れのイギリス人 Lindley Murray の Grammar of English Language から, Orthography, Etymology, Syntax, Prosody の部分のみ抜粋翻刻したもの。見返し上部に Abridgement of Murray's English Grammar とあり, その下にモルレイ氏著・英吉利小文典・渡部氏蔵版と記し, 巻末に「無盡蔵印」の朱印がある。発行年, 発行所など不明であるが木版刷であることなどから, 慶応か明治元年頃江戸で刊行されたものと推定されている。

ちなみに, この原本は, すでに1840(天保11)年に, 天文方見習渋川六蔵によって『英文鑑』全24巻として全文蘭訳本から重訳されている。これは江戸時代にはじめて邦訳された英文法書だとのことである。<sup>25)</sup>

以上, 7 書目の翻訳・翻刻が, 蕃書調所に開成所時代の英学教官としての渡部一郎の仕事である。

#### 4 会訳社による『中外新聞』『中外新聞外篇』の発行

本節では開成所時代の渡部一郎のもうひとつ重要な仕事として, 会訳社による新聞発行のことについて紹介しよう。<sup>26)</sup>

会訳社とは, 開成所に集う洋学者たちの自主的集団である。彼らは当時横浜で発行されていた英字新聞から, 主として日本に関する記事を翻訳し, 最初はこれを社員に回覧し, のちさらにこれを筆写複製して幕府当路者に配布したのであった。

会訳社の中心人物は, 蘭, 英, 仏, 独語すべてを独学で修得し自由に駆使したといわれる, 名古屋出身の奇才柳河春三であった。彼を中心に集まった人々は, 蘭鑑三郎, 荒木竈之進, 加藤弘蔵(弘之), 箕作真一郎(麟祥), 堀達之助, 竹原勇四郎, 内田弥太郎, 渡部一郎(温), 石橋鎗次郎, 春日与八郎, 外山捨八(正一), 箕作奎吾, 黒沢孫四郎(河津祐之), 鈴木唯一, 石川長次郎, 小川吉之助, 堀越英之助, 川本清次郎, 市河斎宮といった当代新進の洋学者たちであった。

彼らの翻訳したのは, 文久3年にポルトガル人エフ・ダ・ローザ(F. da Reza)が横浜で発行した The Japan Commercial News であった。これを『横浜新聞』『日本交易新聞』『日本貿易新聞』とつぎつぎに改称し, さらに原題が Japan Times と改められると『日本新聞』と題して発行した。この筆写新聞の発行は1863(文久3)年より65(慶応元)年までであったが, やがて彼らは幕府倒壊のさなかと言うべき慶応4年2月にいたって, 活字印刷による『中外新聞』なる新聞の発行をはじめた。

この間の事情を, わが国新聞史研究の先覚小野秀雄の筆によって記すと次のようになる。

「文久年間以後幕府の勢力の失墜は殆んど其極に達した。皇室を擁する西国の強藩薩長土肥の勢力は次第に強大となり, 幕府は遂に政権を返上して各藩と列を同じうするに至った。斯くの如き急激なる大変革は社会に何等かの影響を与へずには措かない。即ち皇室中心の勤王派に対して, 幕府の旧勢力を出来るだけ維持せんとする佐幕派が之に対立した。

於之西国の強藩は此佐幕派を一掃すべく錦旗を擁して東下し、江戸は是等の諸藩に蹂躪されんとする状態になった。江戸にて筆写新聞を発行しつつありし会訳社は此時之を活字印刷に改め、其題号を「中外新聞」と改題して、先づ幕府が朝敵と称せらるゝことの謂れなきことを主張し、西軍に対する反感を可なり露骨に表現した。時は恰も慶応四年二月である。「中外新聞」あらはるゝや幕府系の学者は競ふて新聞を発行し、数ヶ月にし多数の新聞を江戸及横浜に見ることゝなった。<sup>27)</sup>

慶応4年はいうまでもなく戊辰の年、この年9月に元号は明治に改まる。その前年10月にすでに大政は奉還され、12月には王政復古の大号令が出された。慶応4年になると、3月14日にいわゆる五ヶ条の御誓文、4月江戸開城、5月上野の山における彰義隊の敗走といった激動がつづいてゆく。まさにかかる激動のさなかに、幕府側の知識人によって『中外新聞』は発行されたのである。<sup>28)</sup>

『中外新聞』の大きさは今日でいうB6判、5～6枚綴で、3～4日毎に発行され、主として横浜の英字新聞の記事のなかから、自分らの立場、すなわち佐幕派の立場にたつ情報を抄訳掲載した。このように『中外新聞』は、激動する国内の政治・軍事状況を、幕府側に立って報道するとともに、さらに翻訳のかたちをとって官軍側への叛意をも表明することになったから、反官軍意識濃厚は当時の江戸市民に積極的に迎えられた。そしてやがて『中外新聞』は、その紙面に盛りきれない記事や投書を収録するために、従来の発行期日とは別に、その臨時増刊号または市内版ともいうべき『中外新聞外篇』を発行することにしたのである。ここには中外新聞より以上に露骨な反官軍の記事や意見が掲載された。

この『中外新聞外篇』の主宰発行者こそ、柳河春三の同僚、「柳河とは殆んど分離すべからざる程の關係にあつた」<sup>29)</sup>といわれる渡部一郎であった。

中外新聞外篇の創刊は、中外新聞におくれること2ヶ月、慶応4年4月であった。創刊号の冒頭には柳河春三の署名で、その発行の趣旨が次のように記されている。

「さいところより、我社中にてあつめし中外新聞、やうやう世に広く行はるゝものから、諸方よりつとひ来つる材料の、いまだ上梓せざるも少からず、脱漏の遺憾なきにあらねば、こたび友人渡部一郎、そをひろひあつめて外篇となさば、彼此相ならひて、遺憾のうらみもなかるべしといふ、おのれもとより其心しらひなきにあらねば、とみにうへなひつ、さては尚あらたなる訳文をも、同し人の手して添へつへくなん」<sup>30)</sup>

この中外新聞外篇に掲載された反官軍の記事として、最も露骨にして有名なのは、第13号（慶応4年5月）に挿入された一枚擡の記事であろう。それは幕府に見たてた松の大樹

に多数の猿がむらがつて、これをひき倒そうとする図である。その横に、これまた柳河春



図-5 『中外新聞外篇』第1号、表紙  
(東大明治文庫所蔵)

三の筆で次のように記されていた。

「あまたの猿一本の松樹にあつまりて、あるひは斧かまなどを持ち枝をきるあり、あるひは鋤すきなどにて、根をはるもあり、或は枝に縄をつけてひきたふさんとするもあり、その図に題す。かくてだに松は根づよき枯野かな 宝雪庵」<sup>31)</sup>

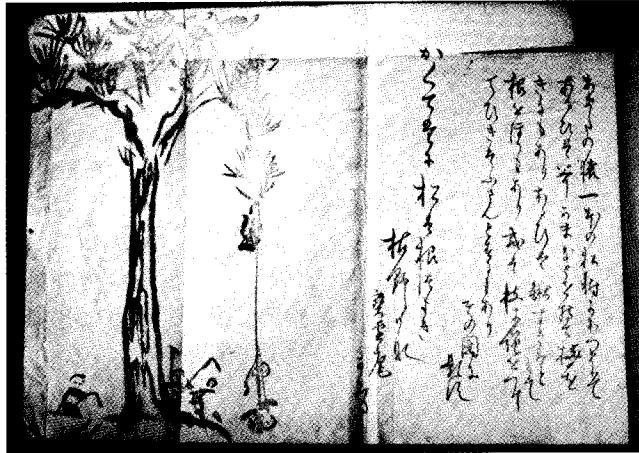


図-6 『中外新聞外篇』第13号折込み（東大明治文庫所蔵）

これは、あきらかに、倒幕派を猿に見立てて田舎待と皮肉り、松すなわち幕府の案外根づよきことを強調したものである。

一方、渡部一郎が中外新聞と外篇に執筆または翻訳した記事は、署名によって確認できるのは8篇であるが、この他無署名のものも特に外篇には多かったであろう。

そのなかには、外篇第19号（慶応4年5月）に執筆した「擬製並重板を禁ずる論」のように注目すべき論稿もある。<sup>32)</sup> これよりおよそ2ヶ月前の中外新聞に、福沢諭吉は『西洋事情』の偽版に対してこれを非難する広告をのせているが、一郎の論稿は、特許権や版權・著作権の意義をさらに徹底して論じたものである。

中外新聞と外篇は、戊辰戦争中すでに内乱平定後の内政・外交のあり方を論ずる論説を掲載している点でも、当時発行された他の新聞をはるかにしのいでいた。<sup>33)</sup> そして、特に中外新聞は当時としては最も多い1,500部内外の発行部数をもっていたのである。<sup>34)</sup> しかし、これらの新聞は、慶応4年6月8日に新政府によってなされた新聞の無許可発行禁止の弾圧によって廃刊された。

中外新聞はこのときまで45号、中外新聞外篇は23号発行されたことになる。

戊辰の内乱における洋学者の態度として、上野の山で官軍と彰義隊とが打合う鉄砲の音を聞きながら、なおわれ閑せずとウェーランドの経済書を講じたという福沢諭吉のエピソードが最も有名であるが、開成所教官としてより深く幕府にかかわった渡部一郎には、そんなのんきなことはしていられなかったであろう。

開成所において、一郎は英学の指導者であるだけでなく、今や所内反官軍グループの中心人物に押しあげられていた。しかし15代将軍徳川慶喜はすでに上野寛永寺に塾居し恭順の意を示し、やがて水戸に退去、そのあとを相続した家達は江戸を追われて駿府70万石

に封ぜられた。慶応4年5月24日のことである。

開成所もまたこの頃にはすっかり機能停止におち入っていたであろう。渡部一郎は、他の徳川家家臣ともども家達にしたがって、江戸をはなれ静岡に赴いたはずである。文字通りの都落ちであったが、この時、一郎満31才、少壮の働きざかりであった。

## 5 沼津兵学校での渡部一郎

家達とともに静岡に移った渡部一郎は、とりえず明新館付属となった。明新館とは、幕府直轄の昌平黉の分校のようなものとして、安政5年に創設されたものである。<sup>35)</sup> この時、一郎は筆墨料として俸給1ヶ月1分を得たという。<sup>36)</sup> これを1年に換算すると3両である。これに比して開成所最後期の一郎の俸給は、おそらく1ヶ年金15両であったから、5分の1の減収ということになる。

静岡に移った徳川家は、教育事業に力をそそいだ。江戸をはなれた学者は多かったから、教授陣の人材にはことかかなかったのである。静岡に移るとすぐ「府中学問所」の創設が計画された。同時に「沼津兵学校」の設立も、すでに慶応4年4月頃より江原素六らを中心に準備がすすめられていた。

そして同年12月、附属小学校とともに沼津兵学校は創設され、翌明治2年正月より授業が開始された。<sup>37)</sup>

一郎もまた、すでに兵学校創設準備中の前年10月に教授方に任ぜられ、11月には一等並教授方兼改役を命ぜられた。校長に就任したのは、元開成所教授職西周である。

沼津兵学校の課程は、資業生と本業生に分れていた。資業生は4ヶ年の一般基礎教育課程として、外国語学（英仏のうち一科）、窮理、天文、地理、歴史、数学、書史講論、図画、調馬、銃銃砲、操練などが課された。このうち窮理、天文、地理、歴史などは、主に英仏語の教科書によって教えられた。

本業生は歩兵将校科、砲兵将校科、築造将校科のいずれかを履修する、3ヶ年の専門教育課程であった。

入学資格は、徳川家家臣の子弟であること、年令14～18才であること、身体壮健であることなどであったが、入学時と資業生から本業生になる時、さらに本業生を修了するとき、それぞれ試験が課された。

教授陣は、頭取西周のほか、一等教授は、伴鉄太郎、塚本恒甫（明毅）、大築保太郎（尚志）、赤松大三郎（則良）、田辺太一（蓮舟）、であった。昌平黉教官で儒者だった田辺をのぞいて、他はいずれものちに陸海軍の重鎮となったが、塚本は洋算導入に功績のあった数学者として著名である。また赤松は、のち東京製綱株式会社を渡部一郎とともにおこした。

渡部一郎は一等教授並であったが、英学科主任と言うべきがその任務であった。沼津兵学校では、会話文典だけでなく、万国地理、窮理・天文の概略、万国史・経済説の大略は英・仏書によって教えられたから、これらを担当したであろう。また既述のごとくマクドゥガル（The Theory of War）の翻訳（『陸軍士官必携』）もあったから、これによって本業生に対する講義もおこなったであろう。さらには後述のように、この時期『仏学初級』なるテキストを刊行しているようであるから、フランス語の初級も教えたかもしれない。

兵学校教官として一郎は、毎日ウェブスターの大辞書を小脇に抱へて登校したといわれ

る。<sup>38)</sup> 幕府倒壊による敗北感を抱きながらとはいえ、徳川家臣の子弟を新しい時代の新しい手として育てるべく、それなりの情熱をもやしたにちがいない。



図-7 沼津時代の渡部一郎（『明治文化全集』第14巻より）

兵学校で学んだ者からは、たんに陸海軍の関係にとどまらず、政治家島田三郎、小説家塚原靖（渋柿園）、ミル代議政体論の訳者永峯秀樹、経済学の田口卯吉といった多彩な人物を輩出したのである。

渡部一郎は明治4年1月に一等教授方に昇進したが、同年夏には東京に帰り、さらに新政府に出仕して12月2日付で陸軍兵学少教授となった。当時、わが国の兵制改革を推進しつつあった兵部省は、沼津兵学校に対する干渉をしだいに強めるとともに、そのすぐれた人材に注目し、自らの傘下に吸収しはじめていたのである。明治3年春には一等教授方赤松大三郎が兵学大教授に、また頭取・西周も兵部省出仕を命ぜられた。旧幕臣の新政府出仕に最も熱心に斡旋の労をとったのは勝海舟であったといわれるが、教授陣のみならず資業生にいたるまで続々と新政府に出仕させられたのである。

一郎の場合も例外ではなかった。

かくて沼津兵学校は、明治4年9月に兵部省管轄下におかれ、翌5年5月には陸軍兵学校に吸収され廃校となった。

渡部一郎が沼津兵学校教官として活動したのはおよそ2年半という短い期間であったが、

開成所時代におとらぬほど活発に翻刻・出版の仕事をおこなった。

沼津時代に新たに翻刻・出版したと思われるものは、次の4書目である。

8.<sup>39)</sup> 経済説略 翻刻 全1冊 明治2年 沼津刊 一橋大学所蔵。

本書の中扉には *The Compendium of Political Economy; from the Lesson Book./Edited by watanabe & Co./At Numadz. Maige 2nd.* とある。目次によって内容を示すと次のようになっている。*On Value. On Wages. Rich and Poor. On Capital. On Taxes. Letting and Hiring. Division of Labour (Smith).*

本書は沼津兵学校のテキストとして、特に資業生の英仏語のなかの一科として経済説の大略が教えられていたから、そのテキストとして使用されたものと思われる。しかるに、この原本となった、中扉にいう *Lesson Book* は長らく不詳とされていたが、松川七郎によって、これがほぼイギリスの経済学者リチャード・ホエートリ (*Richard Whately, 1787-1863*) の著書 *Easy Lessons on Money Matters (Dublin, 1835)* であることが明らかにされた。<sup>40)</sup>

たゞし最後のアダム・スミスの国富論第一篇第一章の最後のパラグラフから分業論を紹介した部分は、ホエートリの原書にはなく、不明とされる。

いずれにしろ、一郎が翻刻した『経済説略』は、少なくともこの点において、すなわち「スミスの学説や思想の重要な一端を、原文で、しかも教科書という形でわが国に伝えたおそらく最初のものの一つだという事実」<sup>41)</sup> によって、わが国の経済学史、あるいはスミスの学説や思想の導入史上、不滅の意義を有するものとなっているのである。

なお本書は、翌明治3年に慶応義塾の小幡篤次郎によって『生産道案内』として訳述され、さらに明治7年には西村茂樹によって『経済要旨』と題して邦訳され文部省より刊行された。

なおまた、松崎「解題」の著書一覧に「富国経済学大成。未見、不詳」なる項があるが、これが本書と関係があるかどうか、今のところ全く不明である。

9. 英国史略 翻刻 乾坤2冊 明治4年、沼津刊 九州大学所蔵。

本書は未見であるので、飯田宏の記すところをそのまま引用しよう(原文たて書き)。

「和紙和装の活字本。半紙判と美濃半截の中間の大きさ。見返しに明治三庚午、官許、英国史略、渡部氏蔵版とある。乾坤2冊で、乾巻は172頁、坤巻173—344頁である。全部英文で、活字は『経済説略』のものと同じの大きさであり、タイトルページには、*English History (New Reading Series)* とあり、イギリスの基督教智識普及協会が1861年ロンドンで出版したものの翻刻である。」<sup>42)</sup>

本書もまた前書同様、沼津兵学校のテキストとして使用されたであろう。

なお、松崎「解題」には、「英国史略訳本。未見、不詳」との一項があるが、これも本書と関係があるかどうか、全く不明である。

この他、刊行された年はすでに一郎が沼津をひきあげた後になるが、兵学校のテキスト用に刊行されたと思われるものとして、次のものがある。

10. 英文伊蘇普物語 翻刻 乾坤2冊 明治5年 沼津刊。東書文庫、愛知教育大学図書館所蔵。

見返しに「明治五年夏官許、英文伊蘇普物語、渡部氏蔵版」とあり、ついでイソップの肖像画の下に、*The Portrait of Aesop* とある。その裏には別掲写真のような

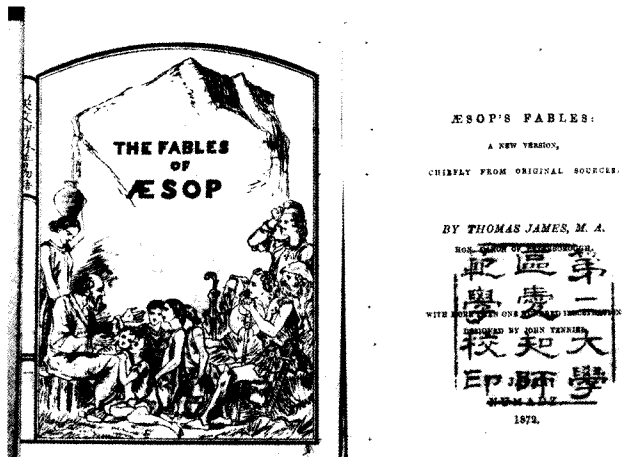


図-8 『英文伊蘇普物語』見開き（愛知教育大学図書館所蔵）

絵があるが、これらは『通俗伊蘇普物語』にほとんどそのまま使用されている。タイトルページには、Aesop's Fables: A New Version, Chiefly from Original Sources. By Thomas James, M.A. Hon. Canon of Peterborough. With more than One Hundred Illustrations Designed by John Tenniel, Japan Nemadz. 1872.とあるがさし絵はひとつもない。愛教大所蔵本には「第二学区愛知師範学校印」という朱印が押されているが、言うまでもなく、これは明治7年2月に設置され同10年2月に廃止された官立愛知師範学校のものであろう。

乾巻は78頁で105話をおさめ、坤巻は79—153頁で106—203話をおさめる。そして乾巻の最初に編者ジェームズによるイソップとイソップ物語の紹介 (Introduction) がある。

ジェームズについては不明であるが、挿画家テニールはイギリスの絵入り大衆週刊紙「パンチ」にも絵をかいいたいさか名のある画家で1820年生れ1893年に死んだとのことである。<sup>43)</sup> 上述のように本書には、巻頭のイソップの肖像などのほかは、挿絵がはぶかれているが『通俗伊蘇普物語』では、テニールの絵を下絵にしたとみられる<sup>44)</sup> 挿画が数葉入れられている。

#### 11. 仏学初級 全2冊 明治5年 東京（推定）刊

本書についてはほとんど不明である。大概如電・前掲書に、「これはフランス語の初等教科書として、渡部温が出版したるもの。これも沼津兵学校生徒のために刊行したるものと見ゆ」とあるだけである。<sup>45)</sup> しかし、前述の「無盡蔵々板目録」にも掲載されているから、刊行されたことはあきらかであろう。

この他、「無盡蔵々板目録」には「英ゼ、チャイルドス、コイデ、ツ、ノーレージ 近刻」なるものがあるが、これは松崎「解題」著書リストに「英文童蒙訓話。原題 The Child's Guide to Knowledge 其他不詳」とあるものである。しかしこれが刊行されたかどうかは不明である。また、松崎のリストに「仏文理学初歩。不詳」とあるものも、松崎以外にふれている者はなく全く今のところ不明である。

以上のほかに一郎は、開成所時代の刊行本の再版をも活発におこなっている。

いま明治3年2月と4年4月に、当時出版条例にもとづく出版免許事務を主管した、大学と太政官史局によって、それぞれ編刊された前掲の『新刻書目一覧』によってそれを示すと、大学版(M3.2)では『陸軍士官必携』、大史局版(M4.4)では『地学初歩』『陸軍士官必携』『英吉利小文典』が刊行されたことになっている。

これらはいずれも沼津兵学校のテキストとして使用されるとともに、当時の英学用テキストとして広く使用されたものと思われる。

一郎はこれらの出版活動によってかなりの蓄財をなしたと言われる。これが後年実業界に活躍する資金ともなったのである。

## 6 新政府出仕と渡部一郎

沼津兵学校は明治2年12月に創設され、5年5月に廃止された。2ケ年半にも満たない短い期間であった。

前述のように、渡部一郎は兵学校が兵部省管下となる前に、東京に帰ってしまった。頭取西周をはじめ、有力教官がつぎつぎ新政府出仕を命ぜられるなかで、一郎もまた兵学校の将来に見切りをつけざるを得なかったのであろうか。そしておそらく、もはや徳川の世が再び決してやってくるのではないことを自覚したにちがいない。

明治4年12月2日、彼は陸軍兵学少教授を命ぜられたが、沼津兵学校一等教授の経歴と、たまたま『陸軍士官必携』などの訳書があったことが、彼にこのような役職をもたらしたのであろう。

しかし『陸軍士官必携』は、徳川幕府の兵制改革のためにこそ、翻訳し献呈したものであった。これが、いまや当の幕府を倒した新政府のために役立ち、しかも自らの新政府出仕にながしかの役割をはたすとは、一郎には運命の皮肉としか感じられなかったであろう。

渡部一郎にもともと軍事に対する関心がそれほどあったとは思えない。彼の関心は、むしろコトバ＝語学であり、その背後にある国々の文化であり人間であった。

そうであってみれば、彼が最も尊敬し畏怖した友人であり先輩は、あの、書画はもとより歌にも通じ、和漢洋の学すべてに精通したという驚くべき天才、柳河春三であったかもしれない。会訳社の活動で緊密な関係にあったこの柳河春三も、その才を見こまれて新政府にいち早く招聘されながら、新政府部内ではむしろ不遇であった。肺を病みつつあった彼が、取り寄せたウナギを食いつつ、「ああうまくいった」の一語を残して突然咯血して逝ったのは、明治3年2月のことであった。

この死を伝え聞いた一郎は、おそらく人生の寂寥を一層強く感じずにはいられなかったではなかろうか。

明治5年11月26日、一郎は大蔵省 紙幣寮七等出仕に転じた。そして役所づとめのかたわらイソップ物語の翻訳にうちこんだのである。イソップが寓話のかたちで語る人生への深い洞察と叡智を、幕末から維新への変転を生き来たった一郎は、重い共感をもって読みこんだことであろう。

しかし、いまここでこの『通俗伊蘇普物語』に論及することは与えられた紙数がゆるさない。



最後に一郎のその後の経歴を簡単に記しておく。

明治7年 長崎外国語学校校長兼長崎師範学校校長

明治8年 東京外国語学校校長

明治10年 依願解任

明治15年 東京府府会議員

明治18年 『<sup>標註</sup>  
訂正 康熙字典』全17冊刊行

明治19年 東京瓦斯株式会社委員

明治20年 東京製綱株式会社創立委員

明治31年 満61才で死す

(昭和57年9月1日受理)

### 〔注〕

- 1) 英学史の研究としては、たとえば、荒木伊兵衛『日本英語学書志』(1931)、柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』(1961)、豊田実『新訂日本英学史の研究』(1963)、研究社刊『日本の英学100年』明治編(1968)、大修館書店刊『資料日本英学史』1.3(1978)、高梨健吉『幕末明治英語物語』(1979)などが渡部温について言及している。特に『通俗伊蘇普物語』については、松崎実「通俗伊蘇普物語解題」(『明治文化全集』第14巻 翻訳文芸篇 1927、以下「解題」と略す)、井浦芳信「日本におけるイソポのファブラスの受容—ESPONO FABVLAS・伊曾保物語・通俗伊蘇普物語を中核としての考察」(東京大学教養学部人文科学科国文学研究室・漢文学研究室編『人文科学科紀要』第46輯 国文学・漢文学 XIII 1968)、谷口巖「福沢諭吉とイソップ物語」(愛知教育大学『研究報告』第23輯 第一部人文科学・社会科学 1974)、小堀桂一郎『イソップ寓話』(中公新書、1978)、および『日本教科書大系』近代編 第1巻 解題(1961)など参照。
- 2) たとえば小野秀雄『日本新聞史』(1949)、同「我邦初期の新聞と其の文献の就て」(『明治文化全集』第17巻 新聞篇 解題 1928)、尾佐竹猛「中外新聞解題」(明治文化研究会編『幕末明治新聞全集』第3巻 1966)、および堀経夫『明治経済学史』(1935)、松川七郎「アダム・スミスのわが国への導入の一齣—渡部温『経済説略』(明治2年)のこと—」(『図書』1971、11)など参照。
- 3) 『中国語学新辞典』(1969)の「唐熙辞典」の項参照。
- 4) 渡部温の伝記的研究としては、前掲松崎実の「解題」のほか、渡部温の令孫・戸塚武比古稿の「初期一英学者の歩んだ道—渡部温のこと—」がある。これは戸塚武比古の遺稿であるが未発表である。私は令息戸塚圭介氏の御好意によってこれを見ることができたが、特に維新前や実業界に入ってから渡部温にくわしく、新たな発見も数多くふくまれている。しかし、近く雑誌に発表される予定もあるとのことなので、本稿ではその内容にふれることを可能なかぎりひかえた。これが早い機会に印刷にふれることを期して待ちたいと思う。
- 5) 松崎・前掲論文。
- 6) 蕃書調所＝開成所については、『日本教育史資料』7、『日本科学技術史大系』8(1964)、原平三「蕃書調所の創設」(『歴史学研究』103、1942)、大久保利謙『日本の大学』(1943)、宮崎ふみ子「蕃書調所＝開成所に於ける陪臣使用問題」(『東京大学史紀要』第2号 1979)、同「開成所に於ける慶応改革—開成所「学政改革」を中心として—」(『史学雑誌』第89編第3号 1980)など参照。
- 7) 大久保・前掲書 160頁。
- 8) 宮崎・1979、6、21頁。なお「出役」とは、「幕府の正規の役職ではなく、他の役職に就いている者、非役(小普請等)、無勤(部屋住二三男厄介等)、さらに調所の場合は陪臣、浪人等を、勤務期間中の手当だけを支給して勤めさせるもの」で、調所創立当初、同所の職員は管理運営職を除いて

すべて「出演」だった（同・p21）。また開成所内における直参と陪臣との関係についても同論文がくわしい。

- 9) 宮崎・1980, 84頁。
- 10) 倉沢剛『小学校の歴史』I（1963）, 855—857頁。
- 11) 『福沢諭吉全集』（岩波版）第2巻, 585頁。
- 12) 同上書, 656頁。
- 13) 戸塚・前掲論文。
- 14) 大槻如電原著・佐藤栄七増訂『日本洋学編年史』（1965）, 691頁。
- 15) いずれも『明治文化資料叢書』第7巻 書目篇所収。
- 16) 大槻・前掲書, 691頁。
- 17) 大久保・前掲書, 181—182頁。
- 18) 荒木・前掲書, 199頁。
- 19) 同上書, 178頁。
- 20) 同上書, 252—253頁。
- 21) 三橋猛雄編『明治前期思想史文献』（1976）, 19—20頁。
- 22) 大槻・前掲書, 712頁には、「川本は川本幸民, 内田は内田恒次郎」とあるが, これは誤りであろう。
- 23) 宮崎・1979, 18頁。
- 24) 荒木・前掲書, 244—246頁。
- 25) 大槻・前掲書, 480頁。
- 26) 会沢社については, 前注2)の文献を参照した。
- 27) 小野秀雄・前掲論文（1928）, 7頁。
- 28) 『中外新聞』および『中外新聞外篇』は『明治文化全集』第17巻 新聞篇と『幕末明治新聞全集』第3巻に収録。なお, 東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵。
- 29) 尾佐竹・前掲論文, 7頁。
- 30) 『明治文化全集』第17巻, 318頁。
- 31) 同上書, 341頁。
- 32) 同上書, 355—356頁。
- 33) 小野・前掲論文, 9頁。
- 34) 同上論文, 10頁。
- 35) 佐藤誠実著・仲新他校訂『日本教育史』2（東洋文庫）, 35頁。
- 36) 松崎「解題」, 8頁。
- 37) 沼津兵学校については次の文献を参考にした。『日本教育史資料』1, 米山梅吉『幕末西洋文化と沼津兵学校』（1935）, 大野虎雄『沼津兵学校と其人材』（1939）, 飯田宏「明治初期の沼津の英学」（『静岡女子短期大学紀要』第4号, 1957）, 笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』上（1969）, 『静岡県教育史』通史篇上巻 1972, 影山昇『日本近代教育の遺産』（1976）。
- 38) 大野・前掲書, 69頁。
- 39) 開成所時代と合せて, 通し番号で示す。
- 40) 松川・前掲論文参照。なお, 飯田宏はその論文において, 本書を「当時行われていたフォーセツト夫人 Mrs Forcett の経済学の初歩からの抜粋であるといわれ」（97頁）と述べているが, その根拠は不明である。
- 41) 松川・前掲論文, 63頁。
- 42) 飯田・前掲論文, 98頁。
- 43) 同上論文, 99頁。
- 44) 小堀・前掲書, 244—255頁。
- 45) 大槻・前掲書, 799頁。

〔付記〕

本稿をなすにあたり，本学国語教室谷口巖教授より幕末明治期の洋学について，同じく東洋学教室中鉢雅量教授より康熙字典等について御教示を得た。また資料の閲覧，写真の撮影などで戸塚圭介氏，および東書文庫，東京大学明治新聞雑誌文庫，本学図書館などにお世話になった。記して感謝いたします。